



令和4年度 第1回共同機構研修会

令和4年4月25日(月)

心を育む保育に繋がる保育者の関わりとは

講師 鯨岡 峻 京都大学名誉教授

これまで「心を育てる保育」について、一貫して取り上げてきました。今回は特に「養護の働き」の核となる「受け止める」という働きについて詳しく論じ直してみたいと思います。保育の世界において「受け止める」という言葉は浸透してきましたが、その核心部分がしっかりと理解されているか疑問に思う場面に多数出くわします。

私は『人間は誕生から死に至るまで、自己充実欲求(私は私の心)と整合希求欲求(私は私たちの心)という二つの根源的な欲求を抱えて生きている』と考えてきました。そしてこの二つの欲求が充足されるか否かによって、喜怒哀楽(正負の)心の動きが現れ、それに翻弄されながら人は生きているのです。一人の人間は「私は私」「私は私たち」の二面の心を正負の二重に動かしています。保育する営みの中で、いかに正の自己感を強化し、負の自己感に陥らないよう配慮するかが重要です。サリヴァンの言う貶めの自己感を子どもが持たないように、私たち大人が如何に貶めの意味合いを持つ対応を子どもに向けないかが、子どもの健やかな成長のカギを握るといえるでしょう。

子どもに対する保育者の対応には『養護の働き』と『教育の働き』があります。子どもを愛しいと思い、その都度の思いをしっかりと受け止め、その存在を尊重する『養護の働き』こそ、子どもが大人を信頼する出处であり自己肯定感の源となるのです。また、子どもが少しずつ大人に近づいてきてくれることを願い、いろいろなことができるようになるように期待して、様々な働きかけをするのが『教育の働き』です。それは大人からの一方通行の働きかけではなく、子ども自身が「大人から何かを学び取って大人に近づこう」という前向きな姿勢と結びついた働きかけであるはずで

「教育の働き」の中でも、制止や禁止、叱るといった働きかけは、子どもの思いと大人の願いの方向が逆になり双方がその思いを調整し合うことが求められるため、対応が難しいと感じられるでしょう。制止が単なる大人の圧力と捉えられるか、大好きな大人の言うことだから聞こうと思えるかの違いは「養護の働き」との結びつきによると言えます。保育者の「受け止める」対応が、子どもの側の「受け止めてもらえた」という思いに繋がっているかどうか重要であり、それは単に「いま、ここ」だけの働きではなく、そこに至るまでの日々の積み重ねによって繋がっているのです。

例えば、思いを受け止める言葉の後、すぐに「でもね」と保育者の願いを伝えて、思いを受け止めてもらえたと感じられるでしょうか。子どもの思いを受け止めていることが子どもに届くのを待つ、その後で「でもね」を伝えることが重要です。子どもを育てる上で、制止や禁止、叱るという「教育の働き」は必ず必要になってきます。しかし子どもの思いを受け止めているつもりでの対応では、子どもの中に保育者への信頼感と自分への自己肯定感が育まれません。保育する営み(あるいは学校教育の営み)の根幹は、子どもと大人との間にしっかりと信頼関係を育むことであり、その基礎となるのが、子どもの思いを「受け止める」という「養護の働き」です。

*上記の要約は、講義をもとに編集したものです。

講義後、たくさんの方からの発言で、より講義内容が深まりました。
ありがとうございました。(DVDには質疑応答部分は掲載されていません)

DVD貸出中

夢みる心をいつまでも

講師 永田 萌 京都市子育て支援総合センターこどもみらい館長

幼稚園の頃、私は園庭の地面に一人で絵を描くことの好きな、ちょっと内向的な子どもでした。一人で好きなことをするのは、楽しい時間でした。そんなある日、担任の先生に二人きりで絵本を読み聞かせていただき、とても幸せな時間を過ごします。その絵本は、アンデルセン作の『にんぎょひめ』。この先生との思い出と1冊の絵本が、私の原点ともいえます。今の職業を選んだのは、悲しくも美しいその絵本に心を奪われ、挿絵を描かれないわさきちひろさんに憧れたことが、大きく影響しています。

私は、絵の学校に通い、その後イラストレーターとして仕事を始めます。現在いくつかの肩書がありますが「イラストレーターです」と自己紹介しています。イラストレーターは何かの目的のために絵を描き、文字と共に一つの世界を創りあげます。様々な作品がありますが、絵本もその中の一つです。

絵本における物語(文章)と絵画は互いに補い合い、助け合っています。その役割分担が美しくなされているものが、優れた絵本だと言えます。出版部数が1位の『いない いない ばあ』などは、その点でも大変優れた絵本です。福音館の編集の松居直さんが『大人は絵を見る 子どもは絵を読む』と言っておられるように、子どもは字がなくても、絵からその本の世界を読み取ります。だから私たち絵描きは「子どもが読むような絵を描け」と言われ、文字がなくてもお話が想像できるような絵を描く努力もしています。

『クリコさんと笑わないクマ ワラクマくんのまいにち』は私が文章も絵もかいた絵本です。あるクマのぬいぐるみとの出会いが、この絵本を作るきっかけです。この物語を作っているとき、幼い頃の息子の言葉「ねえ、早く寝て、早く起きたら、早く大きくなれる？」を思い出しました。そんな思い出が私の中に残っていることに、とても幸せを感じました。この絵本は、私がお母さんでなければかけなかったでしょう。また、我が子が私のイラストの入った連絡帳にシールを貼ることをとても楽しみにしていた姿から、自分のキャリアのスタートとなった子ども達のために絵を描く仕事の素晴らしさを実感しました。

幼少期、私の父と母は「家じゅうどこに落書きをしてもいい」と言ってくれていました。白い壁に向かって思いっきり描く喜びが、今の私の描く喜びにつながっており、両親の与えてくれた最大のプレゼントです。園の先生方が、子どもたちに思いっきり描く環境を作ってくださっていることに、絵を描く者の一人として心から敬意を捧げます。子どもたちには、直感的な表現力のあるこの時期にしかできないことを、思う存分経験してほしいと願っています。

若い頃、やなせたかしさんから手紙をもらい、それをきっかけに一緒に仕事をし「あなたは、愛されて育ち、人から愛される絵を描く。生涯、子どものために絵を描き続けなさい」と言っていただきました。私は見る人が幸せになる絵を描こう決めています。そして、いつまでも子どものための絵を描く、絵描き・イラストレーターでありたいと、今も変わらず思っています。

*上記の要約は、講義をもとに編集したものです。

子どもを育む喜びを感じ、
親も育ち学べる取組を進めます。

[京都市はぐくみ憲章]より



この印刷物が
不要になれば
「雑がみ」として
古紙回収等へ！



発行日 令和4年7月6日
発行者 京都市子育て支援総合センターこどもみらい館
〒604-0883 中京区間之町通竹屋町下る楠町 601-1
Tel : (075)254-5001 Fax : (075)212-9909
URL : <https://www.kodonomirai.city.kyoto.lg.jp/>